二〇二五年十二月発行　六八二号

日々好日

（令和七年十二月発行）　六八二号

インターネットで「岩国龍門寺」を検索すると、正式なホームページ以外に様々な事が書き込まれています。

その中の一つに寺の地球上での位置が書かれてあるのが目にとまりました。それによると寺は北緯34度06分50秒36、東経132度20分36秒14とあります。これは正しいものと受け止めています。

以前に高野山も四国の善通寺、更には中国西安の大師受法の寺である青龍寺もほぼ同じ緯度上にあることを書いていますが、その折に龍門寺も同緯度上にあることを述べていましたが、それを確信したことでした。

日の出の位置は季節により大きく変わりますが、東向きのお寺ですから日の出を拝みながら、高野山奥之院の西向きの大師御廟を正面から拝し、大師との同行二人の信仰生活の一日が始まります。

そしてそれは龍門寺住職としての檀信徒との立ち位置を意識することでもあります。世相の変化は著しいものがありますが、如何なるときも常に檀信徒とともにあり、檀信徒教化と云いながらもその深い交わりを通じて、住職もまた多くのことを学んで今の私があるのだということも事実でありましょう。

住職としての立ち位置は常に平等にして不変である。

弘法大師のお言葉

「もし自心を知るは佛心を知るなり。佛心を知るは衆生の心を知るなり。三心平等なりと知るは大覚と名付く」

（性霊集巻第九）

乙巳年回顧

「光陰矢の如し」と申しますが、高齢者はこれを実感します。この寺報は前の月の十八日観音縁日の参詣者に先ず差し上げるべく発行しています。

今年は未だ一ヵ月余りを残していますが、十二月号なので一年を振り返ってみましょう。振り返ると言っても檀務のほかは何もしていませんので、何一つ目新しいこともありません。先ず劇場型の展開で国民の目を釘付けにした政変劇をみてみましょう。

物事をよく咀嚼してものしずかに語り掛ける石破氏とは対照的に、小柄な身体が全身火の玉かのような印象さえうける高市早苗氏が我国初の女性総理に選出され日本中が狂喜した秋の日々であった。

自民党政治を長く支えた公明党が連立を離脱し、一時は窮地にたたされながらも日本維新の会の閣外協力という展開で総理の座を手にされました。

それは並みの男性政治家をも凌駕する強硬な政治信条で、働いて働いて働いて働いて「世界の真ん中で咲き誇る日本」にするという決意を表明された。

国民が辟易した長いあいだの政治不信一掃の期待もあってか国民の八割もの支持を得ています。これは単に初の女性総理誕生を寿ぐ以上のものがあることを感じさせます。

就任早々の米・中・韓の首脳会談など無難にこなされ期待どおりの外交デビューであったと称賛されていますが、初対面の誕生間際のそれも女性の総理に難しい問題を投げ掛けないのは外交辞令でもありましょう。

横須賀の軍港の艦船上でトランプ大統領の脇で小躍りしてのはしゃぎぶりにはとかくの批判もありましたが、それはともかく、中・露・北朝鮮の首脳の目にはどのように映じたか気になるところである。

靖国神社参拝など近隣諸国を刺激する言動を当面は内に秘めての政権運営はそれはそれでいいのですが、何時本性がさらけ出されるのか国民は複雑な気持ちを捨てきれないというのが正直なところではないのでしょうか。

国内も物価高是正など難問が山積していますが、国民の多くが望んでいるのは戦後百年、二百年を維持する政権運営、日本丸の舵とりをしっかりとなしていただきたいというのが国民の総意だと思っています。

防衛費の国内総生産（ＧＤＰ）比２％増額を二年前倒しや、武器輸出の箍の撤廃、原子力潜水艦の保有などの防衛力強化、さらには憲法改正、皇位継承にいたるまで誰の目にも初の女性総理の政治姿勢は戦後の継続ではないように思われるのはわたしの偏見であれば嬉しい。ＡＩの時代に適応できないでいる気恥ずかしさが不安を掻き立てるのでしょうか。

それにしてもトランプ大統領にノーベル平和賞云々には社交サービスとしても違和感は拭いきれません。核実験容認の発言もありますし、イスラエルとハマスの停戦も力ずくでのことで、後日また爆発があるのではということです。それでも一先ずの停戦は評価してよい。

ロシアとウクライナの戦争ではプーチン大統領にいいようにあしらわれているようにも感じられトランプ大統領の手腕の限界を感じないではありません。

政変劇はこのくらいにして、今年は55年振りに開催された大阪万博は成功裡に閉幕しました。前回の万博は結婚した年でもあり半日ばかり並ばないで良いパビリオンを駆け足で巡り観たことでしたが、今回は年も取り関心も薄く出向くこともありませんでしたが、テーマの「いのち輝く未来のデザイン」は実現できたのでしょうか。その会場の周囲二㌔を囲んだ木造の回廊の一部が解

体されずに残されるという。前回の太陽の塔と同様，万博開催の記念となることでしょう。

未来思考の人間生活のあらゆる分野で貢献できたすばらしい万博が開催されたこの年、埼玉県八潮市で道路陥没による悲惨な事故が発生しました。通行の車が落ち込む影像には他人事でない恐怖があります。

これほどではないものの道路の陥没は珍しいことではなく全国各地で頻繁に起こっているという。高度に発達した社会で生きているのだと思っていましたが、危うい薄氷を踏んでの生活であることを認識させられました。

道路やトンネル・橋・港湾・ダムなどのインフラの維持整備には巨費を費やさなければならない時を生きているのだということを今更ながら実感せしめられたことでした。

我が家のやり繰りも大変ですが、国もこうしたあらゆる課題を達成するためには巨額の経費を必要とします、国民の節税も大切ですが、無駄な支出を防ぐ手立ても必要です。

これは政治不信を招いた政治と金の問題とも通ずることで、巨額な金の流れを透明化する必要があります。何にどれだけの金子が動いたのか判然としないようでは政権は信用できないということになります。

また、政権抗争をもたらした要因の一つが選挙であるとしたら、国民の多くが様々な情報をＳＮＳなどで得ており、各国の首脳もＳＮＳなどネットで情報を発信している時代、一つのことを主張するのに極めて簡略な文言でそれがなされる便利さで活用されるのでしょうが、極めて危うい社会となるのではと危惧します。

ある程度の長文で詳しく説明されたものでないと信用し難いと思うのは現代社会に適応できない人間だとされ、現代人は簡略の文言で総てを正確に理解する能力を備ているのでしょうか。

それとも長々とした文章を読んで深く理解することなどこの忙しい時代には無駄なことだとでも思っているかに感じられる社会の危うさを思わないではありません。

戦後八十年の今年、不戦の国が一日にして戦争大国にもなる危機感をいだくのは、ＳＮＳなどの情報を鵜呑みにし、国民の多数が烏合の衆ともなってそうした国に導くのではないかという一抹の不安を拭いきれなくなった年でもありました。

そして今一つの関心事は自衛隊の出動にまでおよんだ各地の熊騒動である。縫いぐるみの熊は愛らしいのですが、人を襲う猛獣であることを再認識させられました。

熊も生きる為、子育てのために必死なのでしょう。棲息の山にどんぐりなどが不作で、人里におりてきているのだとされる。

あの巨体で柿木などに素早く上り下りするのはおどろきです。人間との共存が難しいことになってきたのは、近年の気候変動による山野の自然環境の変化が関係しているのでしょう。

熊出没の地域の方々の日常生活を脅かすことへの対応は厳しく為してほしいと思う反面、共存は出来ないものかと思うのは無責任なことなのでしょうか。

山里にとどまらず街中にまでの出没は尋常ではありません。多くの方が亡くなられ負傷しておられるという現実は人命最優先の立場からは銃による処置もやむをえないことになります。

最後に老住職の一年を回顧してみましょう。

昨年の丁度このころは肺炎を患い入院していたことを思えば、今年は足元をふらつかせながらも年中行事は通

常通りつとめることが出来たことは喜ばなくてはなりません。とは言うものの尋常でなかった酷暑の夏、高齢を意識しないではありませんでした。お盆過ぎの数日体調を崩して檀務を万徳院に委ねたことがありました。このようなことは昨年までにはなかったことでした。

そんな夏の日々、僧侶としての生涯を法臈七十三年と題して寺報に二か月にわたって書きました。それは高齢社会それも終活などが話題となる中で、十二歳で出家以後の生々しい生き様でしたが、それは誰もが通過する若き日々の世間知らずの若僧の奮闘の歳月であったといえましょう。この歳月があって、龍門寺のみならず万徳院までもが見事に復興がなったのです。

ここで忘れてならないのはそれは檀信徒を巻き込んでのことであったということです。よくぞここまで檀家さんもお寺も何代にもわたって変わることなくご尽力ご協力を賜ることができたことを改めて認知せしめられたこの一年であったということになります。

若き日々、高野山や鎌倉での十三年の歳月は僧侶としての修行を重ねた日々であったと同時に、親の元を離れての武者修行的な一面があったのではないかと今にして思います。

少々のことではへこたれないど根性のようなものを叩き込まれたのだとも思います。それがなければ小なりとも二つの廃寺同然の寺院の復興などの難事にかかわることもなかったということです。

良き師に恵まれ、先輩諸兄との切嵯琢磨はそれぞれに私の非力な部分を逞しく育てていただくこととともなったと信じています。

通津に移転してからの日々は、ほぼ思い通りのことどもが成就実現できたその余韻の中にただ身を委ねるのみで、精も根も尽きて、その余力のみで生きている状態で、更なることは望むべくもありません。

こうした思いの中で五月十八日に本尊遷座・本堂新築十年の記念法要を営みました。何度も書いてまいりましたが、今思い出しても寺の移転などは道路拡幅などの行政の施策によるものや災害などのほかは考えられないことですし、それも多くの檀信徒の居住地域を遠く十キロも離れた遠隔地への移転は寺の存亡にも関わることで、良くぞ無謀との思えるこのような難事に果敢に挑んだことかと感心します。

高齢化はますます進み宗教離れも指摘される中でコロナ禍もあり参詣者減は顕著ですが、駐車場完備の利点もないことではなく、寺の体裁を保っています。

それは市の中心部から遠く離れた地域で地価も安価であったことで、当初の予想を超える広い境内地を確保することが出来たということです。

移転十年を経て周辺の団地にお住いの方々とも旧知のごとく接していただく喜びは、なにものにも代えがたい安心感でもあります。

本堂新築により内陣はもとより脇陣も以前とは比較にならない広さが確保でき、それを見込したかのように薬師如来・弥勒菩薩・地蔵菩薩・不動明王・観世音菩薩に加え小像ながら金佛の観音・釈迦・弁才天・釈迦誕生佛などを弘津善通氏より、更に倶利伽羅龍釼を手にする不動明王と弘法大師像を三代博幸氏より寄贈いただきました。

この両氏より寄贈の仏像の法量は大きく、既存の本尊諸仏との間合いもよく安置され、明治維新時に廃寺後に、

復興した寺院とは思えない、真言宗寺院としても遜色のないものとなったことは自賛しても良いでしょう。

この諸仏は私方が画策してお迎えしたものではなく、この時を待っておられたかのように彼方から来山されお迎えした諸仏であることを改めてご報告申し上げます。

両氏よりは仏像に加え様々な仏具などの奉納もあり、更に供花茶湯料なども拝受しています。

こうした経緯を経ての記念法要でした。天候にも恵まれ落慶法要には比すべくもありませんが、多くの方々の参詣を得て移転事業にご協力いただいた方々に、感謝の弁を述べさせていただくことが出来て、やっと重い肩の荷を下ろすことができました。

十年ひと昔と申しますが、この歳月はこの移転の地でしっかりと大きく根を張って、著しい社会の変遷の中で常に変わらぬお大師さまの教法をもって、艱難辛苦する人々を教化し続けていけるかという一念での日々でした。

それは寝ても覚めてものことであるということであり、これのみが龍門寺住職としての老衲が現在唯一可能な所作である。

それは龍門寺だけのことではなく万徳院の現在未来を案じる歳月でもありました。その万徳院で去る十月二十八日、本堂新築三十年の記念法要を営みました。

諸宗派十四師の参列をもってしての落慶法要を念頭にしての法要で、山坂を厭わず参詣の方々と三十年の歳月に思いを致しながらの二時間でしたが、内陣には広家公御寄贈の十二天、十二幅を奉掲して没後四百年を追悼し、慶讃文を奉誦し、創建者の元長公の遺徳を偲び本尊護摩供を奉修し結縁信徒の息災安穏・所願成就を祈念し，法話の後。御写経奉納の二時間でした。

三十年の歳月は流れても満身に感極まる落慶の法悦を表現していた亡父の姿が目に浮かびます。異境から法会を覗き見て涙を流しているであろうことを想像した法要であった。

本堂新築から三十年、山寺のことですから、本堂のみならず、庫裡や茶室、永代納骨堂・山門にいたるまでが樹木に覆われて、建物の維持が心配される現状でしたが、法要当日までに伐採していただいて、風通しもよくなり懸念を払拭しての法要で一安心したことでした。

それは、庭園の剪定作業とは異なり大変な作業で経費も時勢に準じて大枚を必要とした事業でしたが、助言し金銭的にもご協力いただいた篤信者もあり、有難いことでした。

樹木の切り口が目に付き粗野な感じもしますが、その荒々さも春には新芽も出て落ち着いたものに復することでしょう。思い切って一歩を踏み出さなければ、前に進むことなく現状維持に終わるということです。現状維持も大変なことですが、課題に取り組む勇気がものごとを改善する。

☒人、善悪を作せば殃福身に随う

昔、ある国に賢提という長老の比丘がありました。長く病床にあり、やせ衰え垢穢はなはだしいものの精舎の中であるのに看病する者はありませんでした。

仏、五百の比丘を伴いその精舎に至り、もろもろの比丘に病の比丘を視せしめ緩き粥を作って与えるように告げるも、比丘の臭いことを賤しんで誰も与えようとはしませんでした。

その様子を見られて仏は帝釈天に湯水を用意させ仏の御手をもって病の比丘の身体を洗われたのでした。その時、大地は振動しあたりは光明につつまれました。

国王・臣民から鬼神にいたるまで仏のみ前に至り稽首し礼をなして仏に問うのでした。

「仏は三界の主にして道徳すでに備わっています。しかるに、今、どうしてこのような病穢の比丘の身体を洗われるのですか」と。

仏は国王及び集まった者たちに告げられました。

「如来が世の中に出現するのはこの病比丘のような救護なき者のためである。貧窮、苦厄の者を介護するはその福量りなし。願うところ意のままなり。それは大河の流れるように福が来たるが如く功徳大にして仏道を体得するであろう」と。

これを聞いて国王は仏に問いました。

「この病比丘は先の世でどのような罪をなして病を得て苦しむも治療をするも癒えることがないのでしょうか」と。

仏はお答えになりました。

「昔、王あり。伍伯なる多力の者をして、王威をもって人を鞭打たしめ。それは貢物があれば鞭打つことなく、貢物の無い者には数多く打たしめたのである。

ここにひとりの賢者あり、罪がないのに鞭打たれた者ありと知って、伍伯に問うのでした。

「私は仏弟子ですからもとより罪なし。恕しを垂れよ」と。

伍伯は男が仏のみ弟子であることを聞いて鞭打つのをやめました。しかし、これまで罪なきものを王命とは言え数多く鞭打ったので命終の後、地獄に堕ち極苦を受け後に拷掠の罪滅し、畜生の中に生まれ常に鞭打たれること五百世。罪終わり人の世に生まれるも常に疫病にかかり、痛み離れることなし。

仏は告げられました.

「その時の王とは今の調達（提婆）これなり。伍伯とは今の病比丘これなり。時の賢者とは我が身これなり。我、前世を思うに鞭その身に著くことなし。世尊となり病比丘の身を洗うことをえたのである。

良善なる者を鞭にて打ち、妄りに罪なき者を攻めればその殃は十倍し、その災はにわかに赦されることなく、生きて酷痛を受け失意恍惚たり。

人に蔑まれ財産は衰尽し、親戚は別離す。所有の家屋は災火に焼かれるなどの報いあり」と。

病比丘は仏のこの偈を聞いて己の宿命を悟り、自らを責め懺悔す。患うところは治癒し、心定まりほとけの前で羅漢の悟りを得ることが出来たのでした。

国王は歓喜し、戒を受けて清信士となり、命没するまで修行し小乗の悟りえたり。（法句譬喩経巻第二　刀杖品十八）

◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇❖◇

高野山奥之院弘法大師御廟前奉納御写経　六五九

二巻奉納　岩国市南岩国町二丁目　沖本あつ子殿

一巻奉納　岩国市通津　吉岡　律子殿

（十月十一日～十一月十奉納分）

あとがき

白い秋明菊が風に揺れ金木犀の甘いかおりがただよっていた秋は過ぎ境内は早や晩秋というより初冬の様相を呈して寞々としています。その中で唯一クロガネモチが赤い小さな実を樹木一面につけて過ぎゆく秋でひとり存在感を示しています。

年賀状も発売されて年の終わりを意識させますが、発行部数は年々減少の一途だという。国民の大多数がスマホを手にする時代、年賀の挨拶もメールで済ませるということなのでしょう。

年頭の風物詩が消え去ろうとしているのは寂しいことですが、何もかもが目まぐるしく変化する時代ですから必然のことと受け止めなくてはならないということですが、斯く云う私も年賀状仕舞を考える年齢である。来年のことはわかりませんが、生きている証として極く僅かな年賀状を買い求めました。

もうすぐ師走ですが、暖房器具などの火の用心は勿論のこと、車の運転も注意の上にも注意を…。

そして諄いようですが、戦後八十年を生きた一人として、女性初の宰相のもと日本丸はいかなる航海を為しいかなる港に着岸するのか期待しつつも、予期せぬ荒波にもまれて沈没という事態をもたらすことのないことを一年の終わりの祈りとしたい。

発行者
高野山真言宗
宝池山　龍　門　寺
吉　岡　光　昭

河の神
水の神なる
弁才天
弁舌・記憶
智慧と名誉も

後の世は
弁財天とぞ
称されて
金運授ける
女神なり

岩国市通津３６３４番地３　〒740-0044
高野山真言宗
宝池山　龍門寺　発行
電話 岩国(0827)38-4611